

土地利用形態		地形面
	集 落	丘陵地、中位段丘面、下位段丘面
	水田 < 一毛作田 二毛作田	下位段丘面、谷底平野面 氾濫原面 下位段丘面
	普 通 畑	山地、丘陵地、中位段丘面、下位段丘面 段丘崖
	桑 園	山地、丘陵地、中位段丘面、 下位段丘面、段丘崖
	その他の樹園	丘陵地
	林 地	山地、丘陵地、中位段丘面、 段丘崖

加わって最近では、牧草畑、きうり、いんげんのような園芸作物の畑が目立っている。桑園は耕地面積の30%前後を占め、段丘面のみならず、山地丘陵地の斜面にも見られ、幾種かの利用形態がある。従来から、この地域での最大の現金収入源となっている。最後にこの土地利用と密接な農業経営の面から考察を加え、ここが強力な消費市場から遠く、盆地という開かれた場所であり、地形面にも平坦面が少なく、そして生産性が低いということ、又気候条件、労働力の面、農民性の問題等、土地利用に大きな制約を与えているということが出来る。

印旛沼北部低地の地形と土地利用

— デルタと輪中の例 —

相馬 伴子

論文の目的は、地域調査の基本である地形と土地利用を通じて、地域の性格を把握するものである。

調査地域は、千葉県北端で、北は利根川南は、印旛沼に接する利根川による沖積平野である。行政区界では、印旛郡本野村と、栄町の一部布兼である。成田線で上野より一時間半の全人口中八割が農業の農村である。

印旛沼は、北に唯一つの排水口をもち、利根川に注いでいるが、元来、利根川の遊水池の役割をになつてきたもので、本地域の逆デルタも利根川の氾

氾による逆流で形成された極めて新しい沖積平野である。更に調査地域には典型的な輪中である。利根川の中洲も含む。

本論は5章より成り。

オ1章 地域の概観

位置、行政区界、産業別人口構成、気候、歴史の概観

オ2章 地形と土地利用

地形分類と各地形面記載、土地利用の概況、デルタと中洲の水田と畑作、地形と集落立地

オ3章 農業

農業規模と就業構造、農業生産と出荷の地域性、米作の地域性

オ4章 印旛沼の農業水利の問題

農業水利事業の沿革と現況、水害の与えた土地所有への影響
○工業用水と農業用水の問題

オ5章 地域の性格

地形は、地形区として、調査地域の一部である台地と、低地に大別し、前者を台地面、谷底平野、斜面に、後者を、利根川中洲面、デルタ面、自然堤防、旧海道等に分けた。

地形は、形成過程に関しては、問題は見当らなかつた。デルタの沖積層は約20mと判定した。土地利用と地形の関係に於ては、低湿なデルタ、中洲の為、堆積地形の微妙な違いが集落立地のキイ・ポイントになっている。集落は江戸中期の新田村で、形態的には、完全な輪中である。周囲を自然堤防で囲れた本地域は、灌漑用水取得の上で大きな制約をうけてきた。明治期の動力揚水機の導入以前は、用水の坎を堤防に通すことは、堤防決壊を招くため、輪中の耕地は全て畑作であつた。現在でも、動力揚水機はこの地域の水田農業の根幹であり、小型揚水機の普及は著しい。土地利用の特色は、単純な一毛作田卓越と高畑の集約的利用に見られる。高畑は水害常習地域であつた本地域の歴史的遺構であるが、高畑には1年2〜4作で、蔬菜がつくられ行商を通じて、東京市場へ出荷されている。

オ3章農業で行商出荷を検討したが、行商（農家の主婦が大部分）が地域に与える影響は極めて強いもので、作物作付の種類を制約し、共同出荷を妨げ、近郊農村への脱皮の進まない一因となっている。

印旛沼の遊水池的役割は、大正年間に利根川口に水門が完成し、消滅したが、利根川という大河川を制するには、国家的治水事業と動力揚水機設置の

水利事業が、平行して行われることが必要であった。このことはオム章で概説しておいたが、更に水害を契機として明治へ大正にかけて、大地主への土地集積が進められ、農地解放前の小作地率 60% の高率で食害の差が著しかった。現在、これらの問題は解決したが、現在進行中の国営印旛沼干拓事業が、農業用水の水利施設、秩序野を通過して、地域へ役観を与えるであろう。

本地域の性格は、一言にして云えば、利根川と印旛沼の間に位置する自然的位置から来る制約、即ち、低湿で常に水害の危険にさらされ、更に、地形の制約をうけて、動力揚水機が、水田農業に不可欠であること、及び東京に近いことが、行商の発達を促し、利根川流域の単純な一毛作地帯にあつて、島畑での蔬菜栽培が盛んで、都市の膨張と共に、行商は衰えをみせず、発展をうけるであろう。最近の動力耕耘機の導入に始まる機械化は水稲中心の本地域に於ても著しく、労働力の不足が、茨城県からの季節労働者に依存している現状を打破する解決手段は、これ以外に求められない。

中部九十九里海岸平野の地形と土地利用

高井良光子

地域と論文構成

卒業論文作成に当り、千葉県九十九里海岸平野をフィールドに選び、その地形と土地利用の様相を観察し、地域の性格の一端を把握することを試みた。調査地域は、九十九里平野の、ほぼ中央部に位置し、西の台地下より、東の太平洋に至る、木戸川、境川間を中心とする地域である。

論文をまとめるに当って、オム章では、本地域の自然、人文環境の主たるものについて、その概略を述べ、この地域把握のオム章とし、いくばくかの問題提示とした。が、本地域の生産のほとんどの部分を依存する農業については、次の本論に譲った。本論、オム章、オム章に於ては、それぞれ、地形、土地利用について、航空写真、実地調査、文献、資料に基づき、その現況を述べ、最後に、農業生産について、簡単に触れ、この論文のまとめとした。

地形と土地利用

本平野は、海的作用と、土地の相対的隆起によって、形成された隆起海岸平野で、その地形は、西縁台地下から太平洋まで、約 10Km あるにもかかわらず、比高 7.5~1m、勾配 $1/1000 \sim 1/300$ で、極めて平坦かつ一様である。この平野の地形の最大の特徴は、海岸線に平行に並ぶ砂堆列と、その後背湿地である堤間低地列である。この二地形面は、本平野の大部分を占め